海嶋風土記

乾

ル 4
1249
1

門 ル 呂 4
番 1249
巻 1-2
ル4

海嶋風土記 巻上

外國叢書

二十七

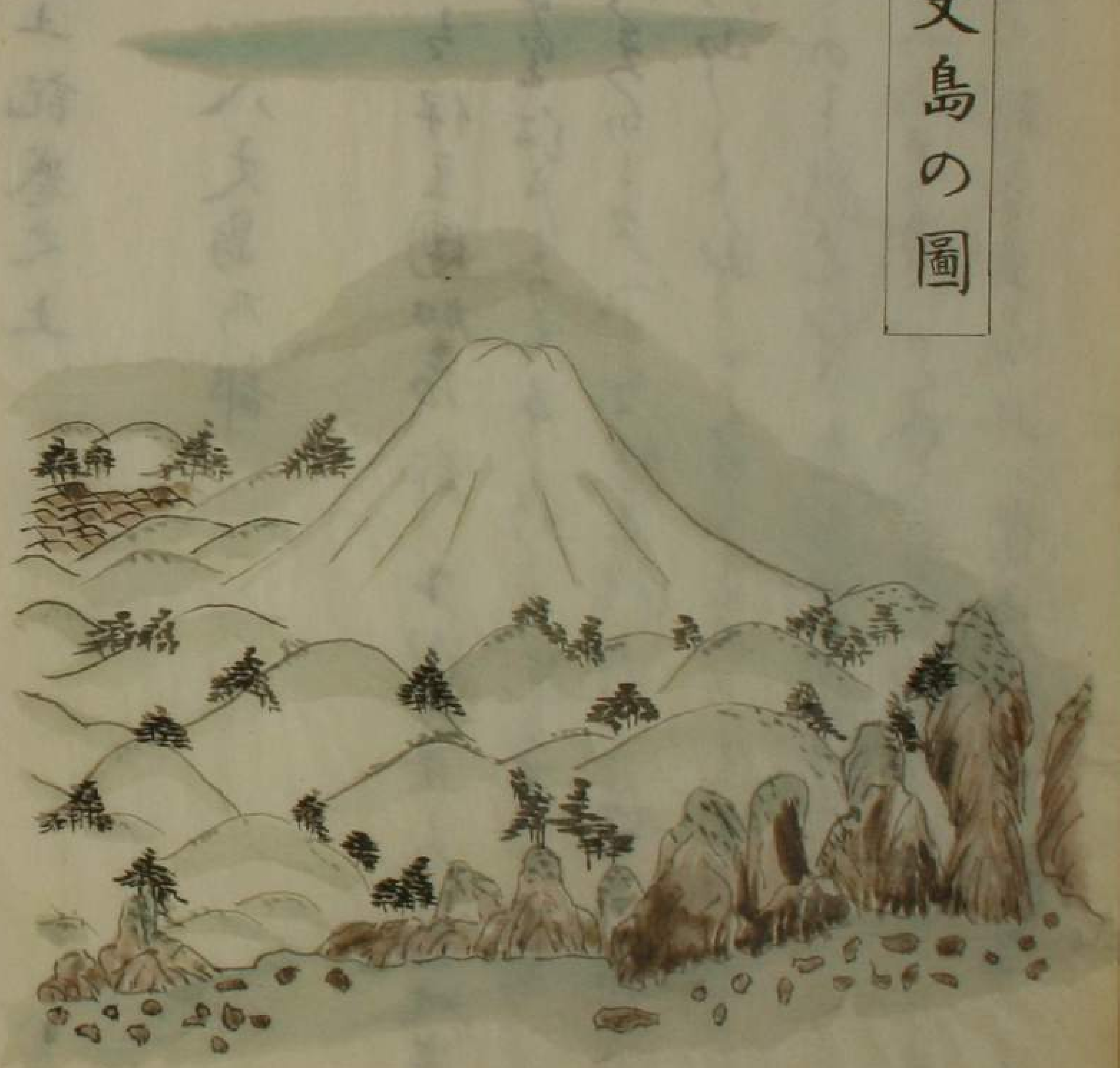
帝國大學圖書

海島風土記巻之上

八丈島乃部

八丈島ハ伊豆國加茂郡下田の湊より巳午の方に當り海上六十里江戸よりハ午の方海上百二十里斗りあり風よく晴たる日ハ伊豆相模山ノ駿河乃富士足柄志摩の山々も遥かに見ゆるとなり 又未申の方に當りて島山ほのかに見ゆるを青ヶ島と云 薩摩乃島へつゝけり西の方ハ果なく見ゆる内にハ年々帰らぬ南東の海を隔つ然れ共船ハ常に流されて潮急にて往來

八丈島の圖



あらたまる未曾乃中かくのことき所ハ一ツ聞見
を待て船を渡すなれとも風波荒く船の損する事を恐るゝ故ハ
す島船乃三年に一度往来あるのミ国地の役所より島の地経ハ
東西三里南北ハ八七里余陸地の役所より遠路ありて海ハ三四
丈或ハ八九丈十丈余乃岩崎ちかく陸より人上る事容
易ならす海乃深さハ岸際すこしも三四十尋又ハ七十尋
其所ゟ沖ハ二百尋三百尋ばかり陸ゟ海底迄ち
かく泥砂の乱流なし故に廻船を入る事能ハ
す岸際かくの如く附ハ洋中に深き所乃沿ひなくて船を
寄る石乃低き所に掛けを辞其ハ網にて島人数百人
集り船を岸乃上へ曳き上ぐるなり大船乃往返船ハ出来す

甚だしくて人力を費す事なれバ往来ハ難成
故船乃夏ばかりなり

一此島開発しハ何れの時何人の仕わざといふ事を
詳ならず此島ニ一寺あり宗福寺といふ此寺の世代記
そのほか古き書物ともあれバ天文乃頃の住寺證跡等
にて候の書記しあるのみ
孝安天皇の御宇に異人神異族を帥ゐて東南の
海より島を十余り穿ちて其中に一さき島を創此ハ大反
び此島なるべしといひ伝へしを考ふるに
孝安天皇の御宇ニ斯乃ごとき沙汰ありしことも定かならず
孝霊天皇の七十二年ニ秦の徐福来る時始皇仙術を

好ませ給ひ東乃海上に遊ひあり爰におゐて徐福に
て童乃男女千人を引連させ海上に出て蓬莱神僊不
死乃薬を求めしめらる甚急なる徐福終に是を得す敢
て帰らす熊野に留りしと本羽通志乃俗書にもしるす
此説正しからハ徐福か薬を採りし為男女千人乃童を此海の島
に配り置徐福ハ熊野に住して死せれハ配島の男女再
ひ帰る事を得すして島に住附しにや
孝霊帝乃皇居ハ大和の国宮の地なれハ然の浦より此
海を東海といふ事偏にいふ故此事乃皇代を何やらん
孝安乃御宇に遷跡を記し其后にも何の時代か此
八丈一島五村に分れ大賀郷といふ村を島乃西戌の方に

て海岸かしらにあり其外にも此村より来船を留る所
より八丈島ひ人物かしこき所也其外又田畑も積
く其所に便もあり三根村ハ子丑乃方にて此村大賀
乃次海岸かしら其所も八丈風の揺るる事有所
船する事も末吉村と寅卯乃方にて船を着る所
中乃外八丈の内にて海岸多く何所も末吉村より
準しかり樫立村ハ午未乃方にて後の末吉中より
小船もし山と海岸と嶮岨なり
一五ヶ村都て竈数凡千軒人数凡六千人になるへし
一惣人乃気質正直にして心柔此島乃気候は寛にて
小島にすれ共暮し所も其千家するを喜ひ口々寓

縫らく物ニ雷み寐く家業にも怠りかち成し
此女つらし髪を結ふ事も一日おきに用ひ足き好みし再
三疎く四ヶ所ニ時々物を遣ふ事や又他ニ交はさ
分女ハ形ちおのが思ひの儘にし古風にし安り
元結紙とも用ふる男計りなりけり　女ハ紅白粉をも
かもらぬ事成ハ笄や簪等をせざるまゝ行きて頭の
頭ふく束ね置きし毎り数多にして甚悪し
髪を解きく立川ニ長きは其女の丈より一尺余
二尺余も結へ成けり
一衣服ハ男女ともに玉地乃木綿を好ミ其色ハ藍染乃
単物を着まく帷子とも着ることにも是を着ることの色

稀なり色ハ青梅色乃ふくひを上品とし其外ハ藍
染乃木綿袷を着ることを常として綿をいれ寸
女乃帯ハ一尺ばかり長さハ五六尺ニ縫ひ紙染木
綿ハ川ニ赤く染たるのみ華やかに用ひ色ある是
を若キハ結ふ男ハ色を入れける帯をも結ひき
と女にかはる事なし
一女乃衣と男乃衣と甚だ女織を織りをさ
なし袷をかけ川く当天なる是様にて菅笠やかぶ物
冠らる人我兄弟是ハ風烈の強き時女人家に在し
一羽ハ国地にて大きく積りまたれる玉地なる
併り又仮名文字かくれ無つるハ国地乃言葉も通

まれもまれしまるの通人物ともの唱へも遠ひ五音もわかち
雑し別く女乃言葉句切りも水く安より難し詞の
あるらし左乃ごとし

出入の事の時　ヲツレヤテ
同業の人集りしハ　ロセイ
知る人猶の事を　セイ又シヨケとも
知らざる事を　シヨクテナイ
似つまらひとぶを　ケシサリ
是非ともかへらふる哉　シヤツ子
速き事を　マアシ
美しき事を　クイチイ
大を　ホヲケ
小を　子ツコヲ
深山事を　モシヌケ又ヤフタンともいふ
謙といふ事を　ココウニ
存するともいふを　アンケノエヒ
猫といふ事を　トリ
和を　コレ
今るを　ケイヒイ

身の廻りの立派なることを　シツホウ
心おきなきことを　シヤエナシ
面白からぬ物くらしきことを　シツタヲベイタ
事なれといふことを　デユ
目けて出しかひ出るといふことを　コ子イリカンデ
心をおさむる事を　ヲヘンチヤ
物をつけれるむかしるを　ハツプイタ
赤飯なることを　マンヲウ
何かを　ホツカア
落るものの哉　カスツタ
物哉失ひたることを　マシレタ
何なりといふことを　ニヤン
一度といふことを　ホウタイ
物乃出来悪きことを　ベタニナル
赤ならすきるとかいふものと　ガインホウニ
借用すといふことを　フウヲオウ
近所なることを　ソウメラバラン
思ひ寄といふことを　ハウダロ
能きことを　ヨツケ
衣を　ヘツラ
岩屋哉　ヤハ
農具ニ酒桶を　コマカ

平鍬を　ヒラテカ
穀物等の類入る器を　ソナヘガスレシろ
篤実なる人を　コトウト
盗賊を　スヽタマメ
社頭を　チツメシヤアカ ことるといふ
持仏を　テラ
脊を　ヘダカ
膝を　ワタシ
むまれを　ヘツリウ
何事にこころを　ウカタ ユガタ
これハ其方へ行ハそろ免ひ
よろしき事なり

糸を入る器を　シヨケ
穀物を入る器を　タカダテ
不実なる人を　ケツケシラ
生まるゝものを　ケベイソラ
番を守る神を
僧を　クロラトド
尻を　シケタ
腸を　メナタ
嘘を　ウナル
道の行衛を尋ぬる哉　ウカタエツイテヘヽ シヤトウレカ
廣き所をいふ　シタトウ

人の男子を　ワラヒトウ　女子を　メナラへ
都て男女ともに其家に生まれハ家を呼す一男ハタラウ
二男ハチラウ 三男ハサブロウ 四男ハシロウ 五男ハゴラウ 六男ハ
ロクラウ 七男ハシツチヨウ 八男ハハツチヨラ 九男ハクロウ 一女を
ニヨコ 二女ハナカ 三女ハデコ 四女ハクス 五女ハチイロ 六女ハクワルウと
呼く下女下男をはヒツクハシといふ此外物毎となく悉く替れ
とも数多く書おし 難し
一 五箇村ともに産業なるハ女ハ皆紬を織るを専とし 貢
物ともに[illegible]又帯紙ハ反を合糸織なる反を生指やり 乃
これを織て納むる此八反を五反となし 其常の紬を
八反五反[illegible]其名をとなく 常織ハむかし 初く

帯ニ織ハ世に出る所若あるとも是を織るには釜を操
ミ糸ときより系とるより紡る車を用ひて悉く持ちより
拵ま揚し染上く色ふ捺張ともり但八丈ハ機より
用ひましく向ふを柱にしとめ前を繰り流かしくもひや
とくその好まかせて織糸ハ五反ツヽ生絹ハ一まり出く
機にかけ織るなり糸乃多く八反ツヽを糸を流むるに
車にて用ひて織るには機とを用ひず此人その切を積て
その結わろふしく志まりよく自然と艶しき光澤
あり皆上京あり呉服屋絹店に多く売渡し 世上に
用ひる通例乃絹を八丈島より八丈丹後織とは品へ
上へ納る絹とは格別殊にしてなれハ生の色絹を一疋

黄乃染料出へ糸性も強く他所乃絹よりも大に違ひ
殊に年を経るに染色あせることなし衣服等に用ひて
益ある絹なり 此島に養ひ糸をもて絹ニ織なす
所の此地の国よりも染色かはりて名高し其機
乃形も国地の機と格別変りたる事なし 染色を黄
桃黒此三色をもって專ら其黄色ハ七月より九月まで刈りとり其
を乾し凡三十七八日程に染椿乃灰を以て色を出し又桃
ハ秋冬乃内陰干にしたる椎の皮を煎し 三十日余も染
是まで椿の灰にて色を出し又黒色は染つけ然し 椎の
皮を煎し二十四五度その余に染よきほとを差入田の
泥沼にて黒の色を出し又きく甲染ることに於て投極殊

深山ニても葛深又ハ椎深乃諸ろ行しさ葉の業千
ろくまふ手なおり　男乃稼ヶ耕作を業とし女ハ是
専ら附る山に入て薪を取蕃薯蒟蒻葛を堀て食
気平時ハ少しろ以て牛にもて属して粮に用ひ
或ハ其多く取りて木の実をもえて喰ひ海にも
出て鮑をとれ網を出きても漁して魚をとる又ハ織して食
乃貝をとり　磯辺る海草なとを拾しをりて夫食の助
とする事名数多き也へ別してる所　国を出る郡山海
に助ケ事なる業し　五也へ其の外ろ　粗耕作をもお給
ふ収ふ方なり
一作物ハ村毎に稲をはじめとして作り一体山畑蔬菜地は麦粟

蕃藷かしき草芋がらを大根を重に作る小豆乃類も少
しく植ふ所もあり一島乃うち大賀江之と櫃村とも地低く
平らる所ある故に穂を出る穀とも作り　末吉村中之
江樫ふもいう所村しは地をなく風の当除し　霧露常ニ
ふかく穂を出もの八甚よろまき也へ芋類は少菜大根の類
を重に作るこの作る所を行れは至て荒を常に生ちて見る
猶作るもの耕作ふ便なしその上潮風に痛みて穀類
乃実り入がたき所乃此作り方出来るもやうにて見
開ニ稲粟も国地乃作より薄く米ハ粒も小し　味ひ悪
く伊豆国その中ちても少し　常あへ　麦ハ七月末より
十二月まで作乃所を次第小麦く　蒔ハ所の年乃

三月半比刈取りて熟せし大豆を麦に打混しぬれハ
蒔き又ハ是を汁にして蒔ときハ実中に蕪候き二月の
中旬して其実の形ちを作し三月初に熟せし時ハ中
にいえるごとく国地にて作る中にて根葉ともに食
ふべし味ひ甘くかし苦くおり余候由程を蒔おり
翌春彼岸の後繁茂芽を出し其由茎七八寸及
ひ寒中にも葉乃枯る事なし 二年にして茎高さ一尺
二三寸余及ひ実中にも葉乃枯る事なし 二年にして
茎高さ一尺二三寸 根四五寸之年にして 此根を堀える
にしき是本附ハ望候にて採食にするなり 葉ハ四季共
すなはち食ふに 数度に着茎を出して之年之始く

花咲実を結ふ時に至りて根葉ともに筋立食しかたし
蒔替る事なし其地に合て味ひ能その根太サ八七
八九寸より一尺二三寸迄長さ一尺自然に成るに似たるに
九月の末比其苗を採り岸候を好むと云ハ翌春其芽を
出し自ら延実に至を三月末四月中比まてに切りて
影して植へ八月上旬より根を掘始め冬寒中まて是を
採りて食す芽を山畑に植置ば苗にても食ふなり
四季ともに絶る事なし 甚大根を八月に種を蒔十月より
取りて其根熟し諸国に録は多く十二月に掘り採る
大根をはじめとして茎の際より切て根を細に刻し生にて切
時より葉を生ず 採りて数度に茎立ち束ねるに至りては

此も其味ひ和らかに甘くしてよし　四屋の瓜なり
瓜薩摩蕃藷乃類なれとも柿の如く白き皮あり
形白瓜に似たるも多く長き事大なるは丈余
天二三寸迄有一尺五六寸　味ひを江戸にて本多の瓜なるに
原等し　茄子形　味ひよし　田地に植て五月六
月頃より十二月中にても取りて食ふ実中より採りて
喰ふ　其木長ひ方にて年越をする事あり　実熟して
よくして三年越乃木にて唐辛も年を越乃木程なる
形く冬乃日もた蕃藪の如く年を越して之を見る
種くも木ハ丈六七尺にも及ふ　味ひハ辛き事なし　蕃
蕷蔓理を見るに此ら乃如く其根あよし

此外荊乃類れハ聖園解の内にあり
小四尺余の木あり　実中に葉の葉に又ハ花咲き
たるもあり　山林の樹木ハ都て常緑木にて枯落
葉する事稀なり又別なる木あり　人草木あり
図して別書に出す

一　此島乃時候ハ寒暑乃気候も違ハす草木常に芽を出し
花も年中絶へすして　如しの生茂れるに気候も春の
四十日にして　桜花も咲き余乃節にハ此に準し秋の気色
乃く草木茂り又実を結ふ事ハ生茂る事にて異なる
園地ハ瘠く実ハ甚弱くして土地相応に耕しても取らず
柿形の西瓜乃風味も富て同しく云ハ此甚よし

忽ち晴け一体暖気ゆへ島人ハ寒中にも澄をとめし
衣服を着する事なし 空も曇り勝にて雨多けく
常に風多くあり 一月に二度位ハ大風吹て雨を
破る 八九月には折々雨をも降らす又大風を必ずふく八
二三十日ほどハ波たち 民家田畑作物を損じ 山林の
草木も吹折られ吹倒されて島人
常に是を憂とす 就中是の 車八丈の生涯尓
も海辺の形勢の凄まじき事 常に大風には島
面しく風強き故 波高く上り 此処の并木の如く
汐柏垣にて一切の樹木も 波も風も 凄しく 人も
風もはしく 波を海底の車の轟くが如く進まずして 響

我等ゆる事ありて 是を地の風の余波又ハ飛然我
潮来る時 海底の岩石を動かし 自ら波を車
の音響きて轟き 波も高く昇り 汐の満
干も九七八尺とやらん 波風なくしても猶十尺
程の汐ハ引き方角に依る 或ハ東より南へ引
西より引 西よりハ東へ引 又南へ引 時に依り
其の中には卯辰より辰巳へ 又申酉の方へも東へ
さし引ありて 汐の満の如く 滝の如く飛び流れ 是を
島山々ハ是を汐と云ふ 此汐に逢へば舟を瞬く間
に拾十里も押し流されゆへ 船人常に是を恐れて憂へ
とす

一食物ハ農業稼ニかしこく素より穀不足なる山人籬落
ろく人乃負擔なれハ善悪にかゝはらす常ニ米麦の飯
を喰ふ事かなハす朝粥夕ハ雑炊或ハ青菜干菜
抔して菜乃様大根芋なとの類且其外海草なとを多く
きさみ入麦粟類乃穀を一椀乃内ニわつか粉ふり加へ
候ニ加へて塩湯を以て粥ニ煮て喰ふ事なしき根蕃
薯蕷葛芋の類ハ其一種ニ煮熟して粮とし足
を喰ふ事多く川ニて叔を交へ又芋ハ川にて摘ミて塩
煮ニして葉を交へ明日の糧ニ摘ミ取りためて喰
ふ遠き時ハ山乃蕨或ハ魚類なとに味噌を加へ根と
喰ひ候芋なとし蕃藷なとに川より芋なとの塩煮ニして
煮なる

を用ひ又猟魚ハ時々是を塩煮ニして食ひ或ハ菜大
根葉なとやうの物と交へ煮て食ひ鰹なとハ丸に
まゝにてまるかしとしめて麦乃実粉ニかけて喰ふ文
海鰯と称して多く是を塩煮ニして喰ふに此鰹
の丸干しき海鰯乃塩煮ハ食乃上品として貴殿又
なるもの又味噌酢醤油を遣ふ事ハ力及ハすして彼
猟魚乃塩以漬ニして晒し間醤油ニして粮ニ当てを
塩酢を増へ上汁乃清ミを醤油乃代りに用ひ
ふとよれハ是を味噌の代りニ用ひ此塩酢ともに煮て
且芋大根乃類ハを志らすニしても風味よし酢ハ之を
なし九年母橙乃類乃木実を絞りて用ひ

又男女ともに酒を好む近来永乃便りて国地乃
酒を絶へず積来りて是を賞翫するゆへ猶好める
思ひなれともなし者とて賞しきものハ力乃及ぶ丈一生
島地乃酒の味ひを知らぬ者なし 此島ニ年始節
句先祖乃年忌又ハ氏神乃祭りにもちひ又ハその祝ひ
佳例祝儀ニ甚だ不愿し 甚家々ニ濁り酒を造り置酒
なと呑しし 米酒ハ是ニ次く麦を醸し 甘蔗よりもする酒有
造りて糟を甘酒と号し 冷ニ此濁酒をも多く呑附て
黒白酒は冷水乃手もとにも又わしあへく薬煙草を
好める国地乃人の一倍にも過し
一家造りハ大小ともにみな高く草葺にして屋根を青

柱は椎木などの大きなる角柱にして 柳梁なとの
木多し 壁ハ古銭用ひずして板或ハ竹を葺き
酒造ルを囲とし 柱立る事く低く床いたして柱立
乃低きを風多と思ひ又床ハなくし 壁を用ひされ
此島也皆孫ト由へ東白乃蟻多く生し 木柱を喰ひ
損するにまかせてハやくくちるゆへ家毎に香を焼乃ひ数物
を焼にて銅気乃造りて 材色も変るて十年
をも清むたる故 を畑へ居住わり 四五人上り柱毎に木
乃大綱をかけて上ゟ床を張り 物を入 其下を
囲ひおし 其（チンマ）地皆孫ト聚由へ床低き故ふる
穀を瘡む故日向ふにもしてもれ損し 又虫を生じ穀

あつかり 彼此邦に於ては 米は一年にして味ひ
替り才減し 二年ハ保川をなす 新かく囲ひ置
けハ減まれ二 二年ハ保ち 麦は年を越す漬置
く減ずれば三年計りハ邦へ置ぬ 粟稗は十年
をも之に及べるまれなり 此邦にて稲を刈りて
数日干 種の本より葉を切取り 穂のみを束ねて
彼の乙苑乃栗なるに 有をさ麦ハ刈干して庭に集
免をのみし 火にかけて ちり除けて焼捨実
有りちらるに 邦にまつハ費にして 火にて遠らし
邦へ出ると虫を生ずるに

一 他家を留へ人家を陽し 山方に祖なるに小き草葉背

乃床の形き小屋を村ぬ家に遣して 婦人へ経水
所郭又と産小僚のなとのを 此地屋に出し 家内の
交わるを禁して 経家のとのと八九日 産婦ハ五十日
なかりし 家に帰るとなるきれ 此邦人に婦人の見る
湿邪を浴 山風の瘴気に感し 他屋にして死し
まるハ其病根を念々せして 生涯苦しむとの計り
難しきれのなるに 他屋に入る時に父母乃重病ある
見届けるの外 父母ともの他屋にゆくく 憐ひ孔子に係と
は甚しく 看病するのに能 又若き女ハ他屋にて
行かるに細きのは 家に帰し 付るに捨置て出る所
至家へいても大乃費家業を怠るのみ之を負しき

ことの八粮なせあり彼といひ是といひ此雑役すら
悪ひらく志うく是我为なる古へハ知らえ今諸国
に於ひてき事凡是ハるまへと出むれ何そ国乃掟
を犯すもんや身乃慎みに促とかして不孝不義をも
免道すか背犯行なる目前なる其源を示しぬるに
心あるものそ各々此事を熟くと以て凡そ神佛乃宗
つまりあるを無きもやくしなら是を先ろとてむらを禁るしと
守へるものは文神佛乃昔め何か海しきるのを教
訓しあれハこなた悦んて今度化尾を壊ち捨その
跡を知らぬやうして化物を捨出る事なるへし
一此島乃牛を飼かるの家毎に一二疋或ハ五六疋つゝ飼

置く田畑をたかやせ村木を引き薪を負せて人化物と成
入るにも悪く出るに於しく人多の助けす出るを去して逃よ
しくては長門乃牛なり常にす入かの行く山に育
川出るの民家に飼ふ牛の不足なる時に此山牛我
将捕へて飼ふ此外の獣を猫気をなりし家々人
家あるまい寸山野にも多くあるして化物と喰ひ荒され
事なひらし備る猫康なるし違ひ人乃目をつくえ
多くる夜分々に穀乃種をと切武ハ葉蕎麦の根乃
散るを掘出るに人是を防ぐるの不能猫は又人家の
飼猫の外山猫とて一種山あるすむ大猫ありて
折ふしは人をも追ひ又里に出て何となく捕へる

さりけれハ常に人目にふれぬ所よりハ白山深く
住けるや深山乃岩窟なとを住家となして元食
ひしる魚の羽なとを取り既に四五十歳にて住山猫
里に出て昼夜となく人家を伺ひ見て人あるき
家の中に農業に出し留守に入て食物を盗て喰ひ
大勢にて乃民家にて母乃懐き外しなとに寝ける
乃小児を奪ひ引出しけるより母驚きて追かけしに
口にくはへし小児乃足をくはへ引きられ八耳の下をかけて
喰ひ切られける人々に取りて捕へられし猫なり
知れたる彼小児ハ早速療治を加へ平癒して今年
今七八歳となりし生存樫立村乃名主と申者

とらへたる彼山猫を捕へ下男とともに立ちそのまゝ
此余力をもつて打ちけるに死する迄責置て
是を石を重しにして海底へ沈めたり其猫の形毛色
常の猫に替る所なし常の猫の形にて只足は筋ふとく
胴太く尾なと長くして尾先まてハ曲ありて是ハ
鉢に似たり

一 此島にて造る所の大船二艘にて是を常用
船に積て出帆して貢乃紬織物乃類此船にて
横浜にて其次をもって船の島用に積み運ふに
三年飯を積て是を島乃者共乃奥様と申て用ひ
而已此元ハ渡海をするにハ大なる事なり

一此島金銀を所持すれとも他国のごとく物を売買ニ用ひず
すへて穀物の数量油なとの外ハ何れも米を以て換
事也 金銀ハ通用せず 捌 穀物を量るに升合
ハ八丈升一升を以て八丈盃と云ふ 一盃を以て壱
両と云ふ 一盃ハ京升二合五勺也 此一盃十四を以て壱
升とす 一升ハ京升三升五合也 又一升ニて十四を以て
一俵とす 一俵ハ京升四斗二升なり 織物何反何と
いふ事 一反を絹にて丈二尺といへる事を八尺として其四尺を以て
一反とし京にて称し掛け又絹を売るに何十何疋と云ふ買人
ても其まゝなり 一反ハ八尺にて四十絹なり
一此島の西山ハ八丈富士といふ山なり 此山ハ元出火ありし所にて水正

此焼出せし山ハ文字也 半中より焼出し 今登
てみれバ是中ハ叢の廻り七里余 高さ二里ある頂に
焼出し跡有 廻り凡深さ十五六丈 廻り廿町ほど
の間に中より水あつて 其辺焼石出る 人の通
ふ所もあり 此山の形ち駿河の富士ニ似たり 山の絵
呼て八丈富士と唱ふ 一名を瓶岸とも云 往古大賀
村親き焼出せし所ニて則此名有りとも云 大賀
江三ツ根村と此山裾ある田畑所々ある所ハ都
焼石にして あまたの乳の様なる石 所々凡石の
節事ニ 此石ハ田を作る 焼石を砕キなけれバ
稲作き土を運び入 其の場所 一塗 其の甚

上ハ低くちを以て低材とす又此山ハ山中ニ
在て低場の跡ニハ石垣なと遺居木なんと中除き
遺れり
一此邊乃内櫻之村ニ白滝といへる滝ありて泉と成ふ
言ふ乃頂ニ諸木生茂りる十所ありて能く是を此内
より水湧出して上滝と九丈落絶乃滝無にかく
又其外十四五丈乃滝落る所ありて瀬乃多
少ハあれと毎常ニハ水幅二三尺斗を此末流れ合て
村中乃飲水耕しの用をなしも此末ニ入れの村々も山より
湧出る清水なとハあれとも民家の用水としてハ至て
乏水あり川なし 堀井 酒地なとも所々ニ有て旱魃ニも
水乏しき所ニて旱く雖も有り 大雨乃時ハ谷ゟ溢れ
出しとかしきもの是水出て田畑を荒損し水損の憂
多年是ハ今とて水を防ぐるとも其防にあたらず 此度
村々ニて堀井酒地を作る道を付して水を流しました
一前ニ記す白滝乃例ニ石硫黄又礬石やうのものゝ令
流乃帯ニありて更ニ出候ハ硫黄抱え能ク其性を
たゞし是ニよりて作る事を詳ニ糺へきまても見へ追く
しらべ論候へきの其苗を作る事ハ又此谷筋
へくいかゝやと此ふ谷水常ニ煙りを出ス所もありと
云へるニ遂乃底ニ温泉出る所あるハ此温泉之儀也

みなれハ人乃助と成座して物語せしに住む村
千足ともに煙るは家の巌石を穿ちて又ここに湯元を
移す様にして場をおき雑しかも那る湯気もなく
えたく家に障もなく忽ち悪身となりし温泉に入る
時は異なる事なく家の周をもつけ湯気を申して先達して
様する日取りと定めし無く諸人を煩ふ事のを入て再
ここに識るものハ五日或ハ七日ならして速に治る事も有ける
みなる又此邊の者も俗しよくて熱身経れ痛し寒
熱往来して常に絶えぬ人十年して八九也此病は酒
邪の病ゑなりしてハ一日まて先して蒸して置むつハ是又
七日ほとにて快よく病根乃除き去のハ十日餘り遠しく

一此島乃鎮守ハ普姿明神 宝明神と唱へ二神相殿
の社也大聖廟なる普姿明神ハ天照太神宝明
神ハ大山住命を祭らし 勧請の年暦ハ詳ならすと
一此島ニ宗福寺長楽寺とて浄土宗二ケ寺あり 宗福
寺ハ古へ西山乃麓にありて香炉山彌陀寺といひしか
津波の為に破却せしにより永享年中称念和尚宗的
といふ僧大聖寺の地内大里といふ寺を移し建立せし
以来也此宗的ハ称念僧の名開基の元祖とも詳ならす
彼宗的師弟乃指を京都の佛師に送りけるに
本尊弥陀乃ひ大きの像を造らせ本堂に納め給ふ運
慶乃作大日如来安阿弥作の仏もあり其外弐体

奈川と交易の事始り永享十二庚申年神奈川の
宗真ちうを請待して住職させ此時より観峯山宗
福寺と改号し曹洞宗乃禅刹となり其後住僧
隠跡まで四代を宗真ちより僧継承し此隠寮
乃負囲ハ只様織乃衣しきを欲きし常に衣食をも粗
薄ありて日頃力を盡し新田新畑をうがち島人にも
農業を教示し或ハ寺乃境内四面にも益ある樹木
を植へ他乃力をかりすして十余年ばかりの当舎
ありの寺となし故今に伝ハり隠跡ハ生涯乃切ゆ
りしすされより陰其乃僧も分乃陰ハり甚だしきへを避て
寺徒を教養せずして檀越乃施物をも受されり寸

今ハ負国ありて報寺と改めし八島人にて常に語り
隠跡の切々を慕ひ飛来して此寺を伊豆国下田乃
海善寺の末寺となして浄土宗となりしが後に又宗旨を
かへて海善寺乃末寺を離しぬ其後再ひしくも隠跡を
天文十五年丙午年入院弘治三年丁巳にて住職を
後住永禄元年戊午入院として僧霊誉宗撰と号すあまり
以来代々誉号を附けり宗西より浄土宗となしやうなれ
ど是ハ乱脈なりとあるをもし彼瑞翁宗的いまだ世西
山乃禁をなして香炉山弥陀寺といひしより寺号に称ふ
あれば僧の名も知れず弥陀寺といひしを改めしを
も知らず彼の世乃上井八郎為朝を祭り今も寺に伝

さて業平なりし此ら安の内ハ八幡の宮を称へ神佛并
頭ノ文字ある宮ありて道の七ケ寺あり　俗家まても
以信ふられと考ふるに義朝の治まて流を継しに
未然なるふかり島人まてかの先称しるかや　又此宮ハ
伝へけるものなし大夫を称へ神ときのことの宮をたまふと
主従となく島を一円に押領しけるを武州神奈川乃
領主奥山宗林といふ者ハ北条の家臣にて康正二年
丙子島にさし向ひ能宮雲加入道か一子若宮とかひしもの兵
七支を同年討捕し其外雲加入道と力を合せ北条の
家中に津系して島を神奈川へ渡しを保作ル所ノ
寺にある一寺乃内ニ建立し名を瑞雲宗的と改め自分の

屋補を乞ひ一寺を建立して神奈川乃宗興寺を請待し
住職とさせし其後又北条家の家臣康正二子年島へ渡り
同十月十四日に若宮并大夫を討し彼島乃古き日記にも
あり又長楽寺を開基年暦住職乃世代等詳ならず
寛暦三年癸酉冬此島へ南京船漂着せし比此寺ハ
荊ニ鱼ならに乗組乃唐人七十一人ありて　其破船乃古木を
以て門を建立しける其門乃記あり

昔年始創者菊地武卿之令祖也今祀者吾
邦先朝大明國宗蔵師六代之僧通詮師也
開林以来相傳二百有八年と記しあるにより
此額を以て寺の宝物に納め八今住地にあり

菊地織部といふもの父なり宗感といふは天文乃比の
僧なりし唐人なりしハ俗家にて此僧ハ且明応年中
に唐船漂流し来りて破船して即死しけるに此乃
者ハ島へ上りそれより當所へ流れ来りて悉く落
命し宗感といふ僧なりしに此僧ふ又此宗感と
位僧して古き庵を又此堂を寺となし建し事る
か庵しと成ふ彼宗感か自筆なりし許叢なる位牌乃
よし

林氏朝章大公陽氏先親夫婦と二行に書
裏にハ大明國二親父母霊位明人宗感也
記しあり此位牌今ハなし南京人建し門乃扁額なり

其記左乃ごとし

海雲山長樂寺乃日本伊豆國八丈嶋之古刹

也山巒聳翠林爭榮茅簷数椽匆弱
於華復畫棟列剎山岡無異於南海
普陀昔年始創者菊地武卿之令祖
也而今奉祀者吾邦先朝大明國宗
慼師六代之僧通詮師也開林以来
相傳二百者八年矣歷世靜修致奉
大士滋宝而而潤及四生布香雲而蔭
乎十界予自癸酉之冬舵海失舵料無得
生皆頼
神明黙伏安寧泊比深蒙嶌長菊地正
武之仁慈名長有之原愛通船七十

一人全得保餘年于居寺半載承通詮
師朝暮安慰甚憐故國之人情意繆実
者同卿之誼予胸中素無文墨序賦不能
勒碑勿克惟畧叙慼之必以記懸
寺之新造山門而垂後耳
旹大清乾隆十九年歲次甲戌
四月　建造
山門惟望後之同志者樂輸整修永
遠恒新千秋不壞則後之功德於無
量者也
宝暦四年甲戌三月

江南雲間程剣南
浙江苕溪高山輝
福建榕城董昌仁
暨通船人衆同立

一此島に上古より遠流乃者ありし事を傳へ其長乃
は浮田乃一統を配せられしより以来乃罪人ハなる
島の人数百五十人此内四十人ハ何れも浮田の末葉
なりし島乃庄屋なり

小島乃部并青ヶ嶋

八丈乃枝島なり小島ハ八丈本島より八町程西の方に當
りて海上二里ばかりを隔て南に一里余東西廿町計り周
三里余の島にて一筋乃出水を見ることなし嶺より一山なり
せしも平地なし両岸さらに嶮岨也竈乃数六十軒程
人数四百人程住居す人物住居産業ともすべて本島
に異ならず只魚猟を本島より多き方にて魚船八九艘
あり此魚船にて本島より渡海往来して絶間の
用を弁ず田をもつしもなく畑も元来嶮岨なる山を
開きて傍急く斥下にて風当強く早枝勝なり
去れども土性は本島よりも勝れてよし風早の為に
なれど年々麦粟類乃出来を本島に備へ 其外諸品

小島乃圖

にほひなし八月種を蒔九月末より十月比まて葉茎
も廿三尺余なり花わたりやして風味能く根ハ十二月
に堀採る形ち丸く白く至て太きハ切口径り八寸九
寸もあり是を女童のくさもれに合候てしくらぬき米弐
入火にかけ候へ焼くに京升一升焼米飯り焚かる
ありと近来至るかし此外大根一升焚茎を
稀ならず

一此小島に八郎明神乃社頭あり宮地廿五間に拾五間
本社ハ九尺四方乃大板葺拝殿ハ二間に三間乃茅
ぶきなり鎮座本紀憶ゑられと言伝ふる由
来を尋ぬるに保元乃乱り父六条判官をはじめ新院
乃御味方にありし戦ひ院軍敗北され八朝敵乃罪の
遁れ難く親族ことく白刃乃下にて失はれしに八郎為朝
ハ武勇乃秀たるによりて上皇其勇をおしませ給ひ
死罪一等を勅免ありて伊豆乃国大島へ遠流せ
られし後嶋々へ渡りて八丈まで諸々のみつき島
人を切り従へ又八嶋を掠く承安三年癸巳八月十五日
に自殺し給ひ其霊を島人恐れ崇め奉る島の鎮守と
崇拝しまつる神徳天乃余に通しけるや源頼朝公
御治世乃比　後高倉宮の御筆にて八郎明神と
唱へまつる神号を金鋼に彫付又御弓を譲て甲冑
弓矢を保存納られしより鎌倉代々乃将軍渇仰

うちつゞき　東照宮　御在世慶長七年壬寅年余
を下し給ひ八丈島紬人奥山縫殿助に命して再び神
殿を造らせて甲冑を奉納させられしより以後此を例
にまかせしや後々島支配の代官より甲冑を奉納し
来りしが宝暦の頃より其事止ぬ彼甚年中縫殿
を紬とし神殿正徳元年　上より免させられしが今の
神主菊池左衛門の祖父菊池虎之助といふもの江戸へ御帳
を出して神殿を　御城へ願出て退く寺社奉行所
より御沙汰ありし時錦乃御戸帳一つれ神殿乃包結
ならびに神主へハ白絹を下し　それより寛延年中
六十二年に及べり　紋戸帳を損しぬれば又奉行へ

古来より供料地として畑ありしに寛永中
乃津浦に接せし也其島奉行にて代官七谷川
が沙汰乃何か乃上まで年毎米二石ツゝ
下されしより是を今に至て年に二度づゝ祭
禮を勤むるに

一此島ハ他国にハ似ぬ家を造り産婦乃居る所の
女、是に接し実乃むくろして屋の内に
して此事を忌む

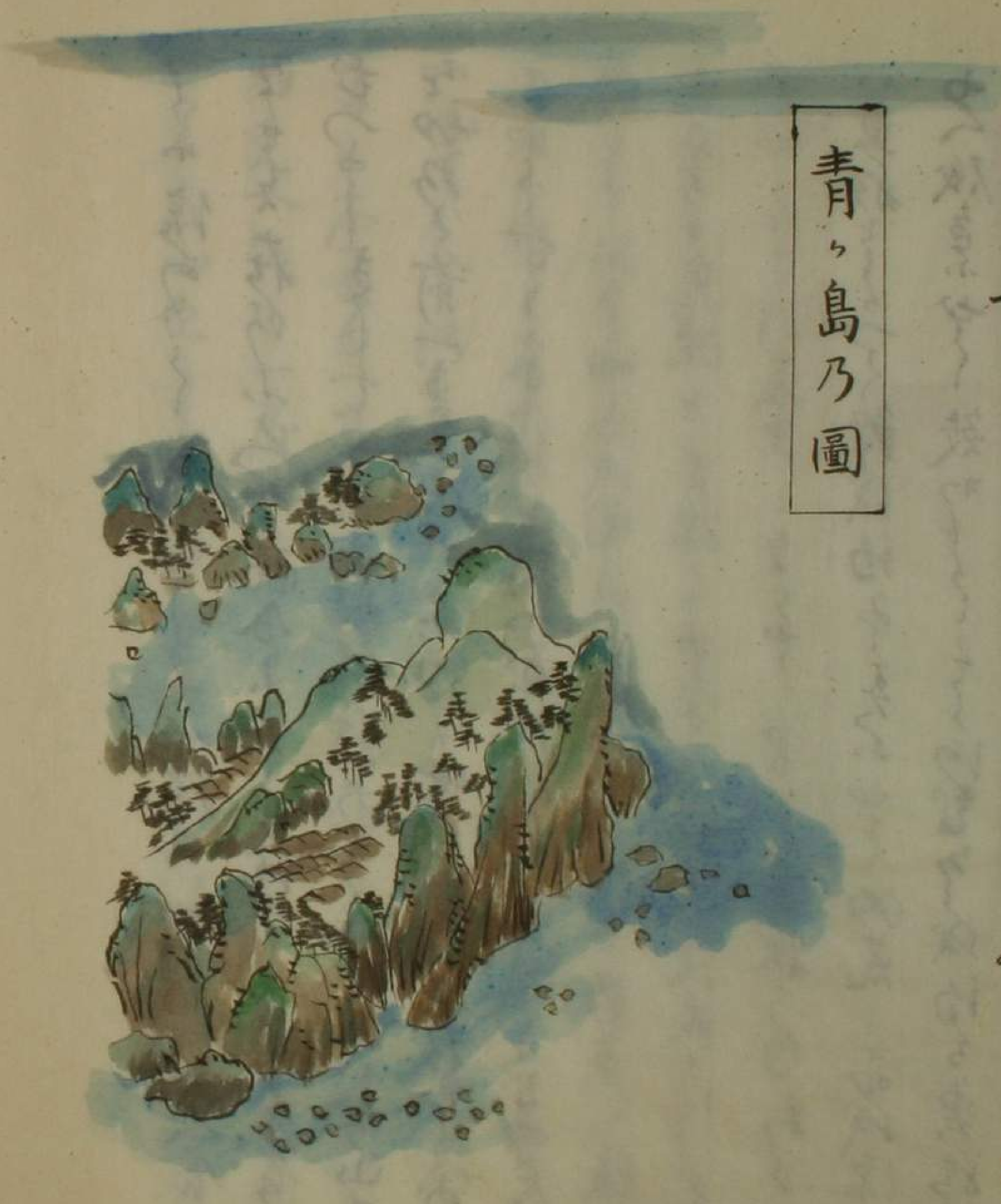
一青ヶ島ハ八丈より年に渡る海上廿里斗り隔て東西
二里南北一里斗り程　五里の島にて竈数五十軒余

人数四百人程住海岸至りて嶮岨なりて海より陸へ
上る事四五丁ばかりなれば其家の岩石を道とし切りて
車なきゆゑ悉く材木をもて横木を結びて階子に造りて麻
綱を下げ是にすがりて行き来す其外椎(?)樹(?)淋しき所へ水薪
抔乃ものを背負ひかかえて登るなれば何しの物を
持て運ぶも男女ともに頭上に戴きて持つ 人数を
八丈ニ而も言語ハ難解なり 難し 仮名文字なりとも見
へ記すハ今昔の名に至るまで神代の始より其隣の人も一文
字も不通用(?)古き書物の類なきよし 此島の人も
物覚へ語るとも一度見たる事ハ生涯忘れまじき氣
質なるを以て正直なる者にて佛の道に落ちる事なし又人乃交

ありても信ありて慎ましく一椀乃物を得ても一人食ふことをせず
互に其家内へ配分して饗膳もなく鬼毒を恐ることなく
むつましくして一島ニ而親類乃如く住居ハ皆山乃半腹
を切払き前一方を開け其内に竹の細代又板なとの上に
て萱みちる家作りを構へ屋根ハ萩茅などにて四尺ばかり
編みて葺き雨露を凌ぎ其中に構を築きて流す凡
穴居なるも湿気を去り涼しく四季乃時候ハ八丈ニ同じ 産業ハ
男女とも田畠を耕し農事を專らにし冬夏秋乃間私しての暇日
ハ魚類をとらへ鰹を釣る事にて海荒くして波浪深からざる
時ハ磯辺に出て魚数かぞへて海魚を釣る魚類形多く
異形なる海魚を釣て大なるものは取獲して魚を其数多く

隠く家毎にあるへ縄をかき付ハ図を物かちて都く様

青ヶ島乃圖



至れるかしこく家業にいそしむ故女ハ農業を営ミ峻しき山
谷乃けハしきにも生絹を織り梯を登りて日を送る春ハ蚕
を飼ひ育ての糸織らせ八丈紬し八丈を是織く畝をも
織料を糸ゟて作るなれバ貯へとし島乃女織物つくる
ことハ別して貢乃絹を染ならバ八丈乃絹也其名
高き事なり又それをかすれハ古へより形をしるしその名を
む此島地の人を云ひたり錦を織ることを以く来
錦乃帯を織る糸のちに菱綾まち綾抹をとりて
子ト八丈乃女子おほしく帯の衣をかへし色きなる島也
染なる錦をかし錦を上ヶあり人々のよろこびてしく
ことを相降ことなく一ヶ年を越し棉織れる也

しも花咲実をなし結ひ笑ミて絹とせるゝ事数年に
常に成稲をて植るゝ事なかりき

一此島往古ハ鬼ヶ島といひしを后に八丈と号く此
乃比よりこのまゝ島と書けるなり偽に彼鬼か島の
名に疑しくやあらんま成ゆゑり民神とし祭り給ふ
乃かしとこゝに古跡あり八郎乃昔語りに鬼形乃
ことを物語りしてもいふ所ありこれハ此島人なり

一此島海邊ハ高き山嶮岨にして島乃内に海辺しき秘
深き洞あり此洞乃内ニ二つの潮あり此所を名付く
八大池といひ是より廿七八丁東の湖ハ是より十二三町ほとく
小池とわけても多くの年の秋池大きに養ひ大池乃ことくの

巌崩も多く五十間餘りの所穴より火氣立昇りて山
焼となれる其煙ふきかへしくて人々噎出すと且夜止を
以前もとを家にかくみ山麓も売りしことなかりしに
八糠ケ者等凡人の苦しみ云ふ計なし然るに此年の末より
山焼大池乃西北邊りに移りける其外もやうやく静りぬ
今は僅々の穴より煙立出れども人の憂なし彼焼け
集りし所五六十間程内ハ煙深く硫黄の氣ありしと所ふ
行き見るべけ難しされど煙を風乃吹しく方へは付
少時も前へ見る事ふ従七八間ばかりの小温泉流れて湧
出す又其流れし八丈もあるの穴あり此内より湧立熱湯の
勢ひ恐しく其色は焦の地へ湧上る事三丈余り又一所

五尺斗りの湯穴あり是も一丈余りて湧上る湯玉飛散
る事急く近付事叶はず此熱湯ともに流れ込て池水一面
に熱し不斗の湯と成申候人馬とも入る時は忽ち湯氣と倶
る湯治すへに病乃為めに用ひ難く是非なく残れり

一 大池乃辺りまでもむかしより麦粟なとを作る畑ともは
砂交りの赤土にて肥良の地なるに彼山焼にて
其後ハ真土となりぬ去れは農夫も土を励み追々
多く土を追ひ土を入替畑となし作付すれとも享保の
頃上りて植付けし作る蕃菽を作り剥も悉
少々しか出来もあり易き処へ彼焼跡の畑に植えけれ
共年々よろしからず人々紫も菖蒲もはびこりて蔵り蔓の

かしらハ根を切除し古を茎ニ而せきりて芋となり其
強きハ秋熟し秋ふくれハ其実なり髪残種を残し置
年中節句諸乃畑ニ作る事あり 昔ニ蕎麦を食ひ来
り故乃由見へ侍るなり 沸亘乃橋大きなるを目にとまり
勇んで農するを励す此島人乃心山神の恵を知りて
土なし将事ニ此池乃邑より人里まで廿所ばかりの
険しき道也 へ池の辺り小蛍川ともあり 雨露を清く
小池と流り 畜類ニ耕す農夫ども小さき稲と成りて水残
結人 薬沢を添て持事 結び池ニ戴きも沼りて 耕
他ともに食事せんとて 己に田を作る畑ともに原ともなり
形もなく作にて以の 蕎麦諸を播り 畑乃内をもつて紀うちえて

湯気出る所の此ハ夫ニまで草木乃葉残らず枯れ芋を並へ
上がり此草をもて結び並べしるしを給ひ其跡へ鍋を乃せ並
べ合て形く湯も沸く 水を入れて飯を炊ぐには温泉ニ酒俗
し夜を山の南に入りて其後取より湯気道り下より
湧く湧きて宮ささる所を尊ぶの形にしと所ニ
一島あり 小池の傍の南の方ニ茅葺乃小社ありて空
海乃作とて 辨財天を安置す その形を拝するに
一尺余り 幅七寸ばかり 厚さ一寸余にて 古丸左ハ乃やう
形ならで 表ニ座像の辨天 十五童子を彫 裏ニ手を
押入るる如くして 指乃跡あり それも又指乃
四方ニ彫刻乃文字あり 巨石なし

表乃図ハ甚彫刻鮮ならす史人香補畫写らる
す然りとも此畫像ハ川乃地渡り参らす安置せし也
いふ謂も知れかたし

一此島風強く荒き所にて浅乃嵐ふかく烈しき時ハ山
崩き大石轉乱落来ちて折或を凌ふ事ふて鳴
響く音高く聞へ此ゆへ島人ハ此を聞て海の
風波を見るとそ 山乃崩崖乃下乃行きて此所也

一此島人衣類ニ紋を染る事も知らずしてまた此所波
乃南乃和漂流して此島ニ来り 其形人の肉ニ染ありと
心得ちるとのみ 草乃ひくく茎を植て紋を染
付く着ちるとの稱ニあり

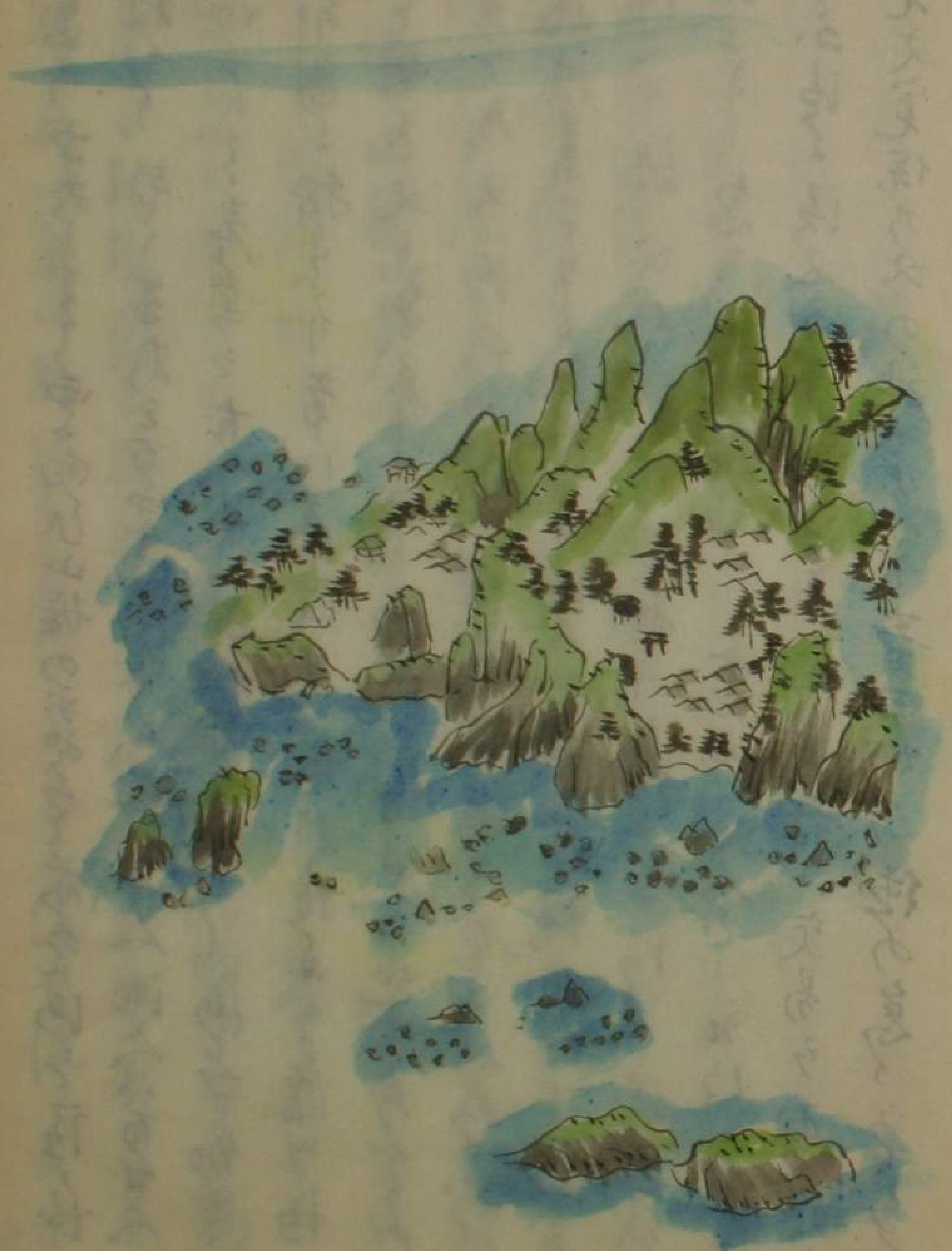
一此島には俗唐といふ小社を建て我老婦及ひ綜
水乃如き是を移し奉る八丈乃島より移りし由人皆
苦侗しし此島をとこもむ

一此島より七里てゝ隔り青ヶ島といへる二三里余を西へ
さけて思ひ出る其所もありのやうにてまた家あり岩島に此
南を鳥形をはなれてある所岩間に年々三宅
乃ひ新島をもの漁父とも来りて鰹を釣るものは此
岩島に住行しまたは家に渕獄を待ちて二三年も四
五里計にあまる哉なり

新島乃部

新島を伊豆国加茂郡下田湊より午未の方に当り海上
十三里江戸より八午未乃間に当り海上五十一里をあり
島乃此砂濱多く波静の成日和を得れは安く
船風ある伊豆相模乃浦々一日乃内に渡り江戸へも
常に行通ふ島乃地猶を東西一里南北へ三里にも
たらぬついへ島なり四季折時候暑寒とも伊豆国に
替る事なし

一此島 孝安天皇の御宇に開けけるとて今に伝ふのミなれ
其事詳ならす大島に次く国とき略ありハ一島も開け
ふやえ至村のうちも形ありしか元禄乃此より枝はなれ若
江村と名附島乃北に遍りて成立故方に向ふ村も本村を



新島乃圖

島乃中央にありて西に向ひ山据の平地にして前ハ海を請て後
村あり　家居三百四十軒余　人数二千人　流人ハ百廿人
いつれも産業を古へより魚猟をもつはらとして海上ノ御を
和島ニ働きにより常に高波をしのきて漁ハを深め鮑
を拾ひ又ハ義身をなし海底へ潜りて蛇をのやうの
貝を取又ハ河鈴をとりよ諸国乃大船乃まてかゝわりて
風波荒き時ハ急ニかゝれハ漁舟ニ帆を揚て伊豆の
浦にも漕つけ又ハ沖乗ル船乃危きを救ひ送り渡し
おのまゝし急ち船を引起し乗渡りてまへく江戸へ魚を
ニネ漬又ハ干して江戸へ出し穀ニ交易スなとして
元文寛保乃比の神主を名乗る等田畑乃徳の息を

思ひ島人ニ勧めて新畑を開きて是より農業をなす
者もあり山畑ハ白砂にて用ひも少き島なれハ
諸作実のらす此地の支乃志ニ従ひ耕作をなしけれは島人
ともにこの地の支乃志に従ひ耕作をなしけれは島人を
勧め畑を開き紀を加ふるを慮もしよく諸
作物実のりて農事を励ひすとも島人ハ染を
一体ち地種き男女を魚猟をなけみて海上ニ日銭
を得し風波の折ハ耕作を助けるなく農事ニ山畑乃
稼を女乃業として男子ハ孫乃使ニ手持物をなし鶏
ともに飼ひ雑穀を搗挽り又飼しの有なる魚の骨を
粉にして魚の腸残りを腐らし又洗ひ流しの水を

は捨て翔より畑へ持運ひて其果まて悉くこゝら縄を
張り栽き其上に物荷ふ棒を立て結ひ一本代
入るゝ所の桶を結ひ合せ竹籠を吊して持運ふ
なれは薪を始米や何の物も彩持られて載せて
持運ふ事も多き二十貫目ほとの物を負ふ物成載
常に山坂を越へ登る又気ならす末縄をもて織り
陸まて乃御さは男程一倍なる働し他にてあらさる
麦粟芋茶大根なと例の芋なり一体白砂にて地気乏しく
ても薄き田畠なり甲斐なし其国よりも蕃薯を
かし作れ実る方なり
一此島の人物ハ律義なれとも純撲なるも見えたり

伊豆の言葉の音は国言語にて此国ニ等しく主とする
男女ともに沖代用の事あれとも漁丈なれハ海を
游し附常乃之持を忽ち切まて乳髪結ふ
女の髪を伊勢縄を以て髪を束ね女ハ取夕水薪なと
の物に取合り載せて其業とする也掃除ささす
なる事なし
一此島人佛を尊敬し先祖をも敬して墓所をも
常に掃除なして民神を崇めの神を崇めとも
十二社の明神を崇む本寺摩詳なる寺ハ下総国
法華宗本寺とて長栄寺を以て開基を権大僧都
日英信住を下総国塩谷備前守の寺なりといふ

一應永廿二乙未歳建立しけるよし棟札にあり

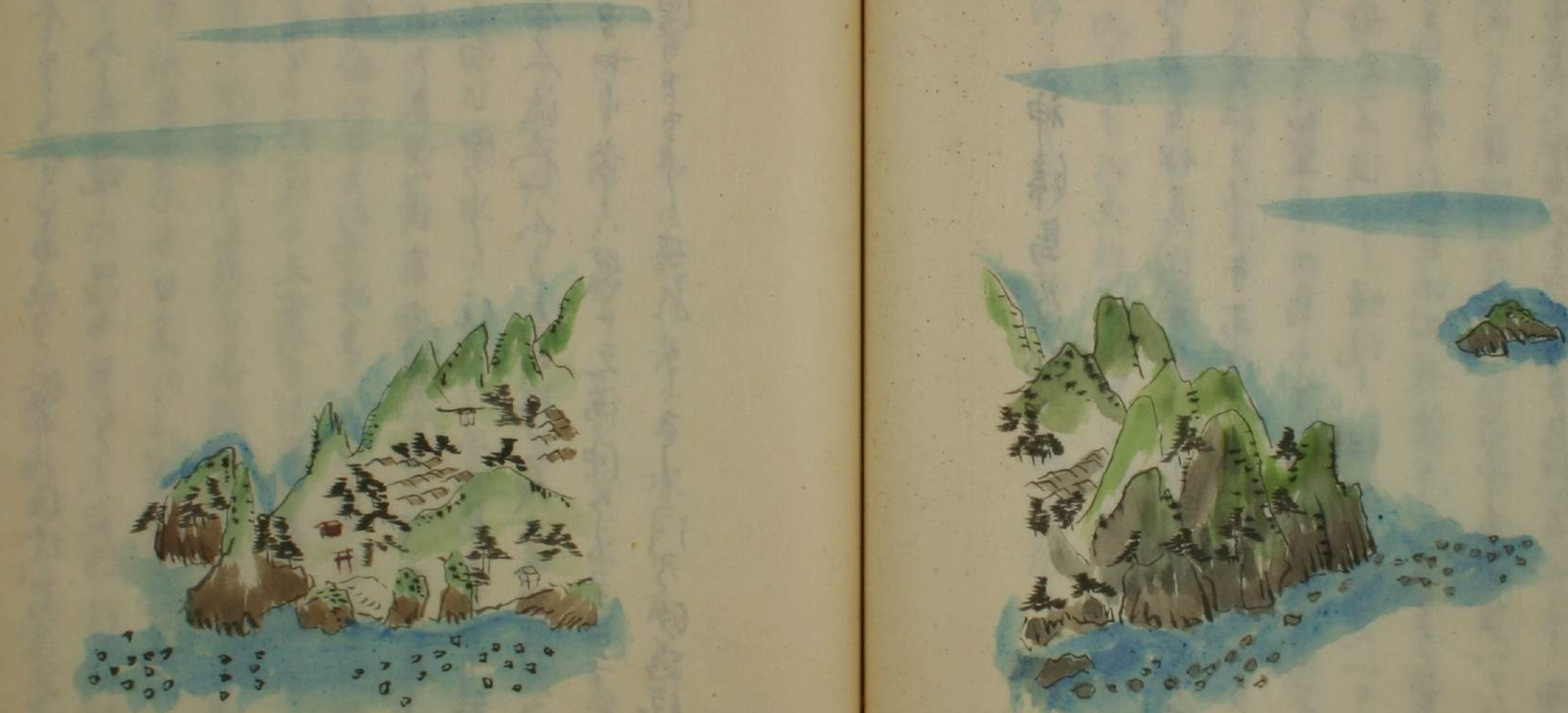
一此島山並乃草木乃ひ島なれとも国地に替る事なし
只山には椎を以し草には椿乃なれとも其木の実
も採りて国地へ出す椿乃実を油に役して出せる又椎
の実は粮の助けに採る事多し山に猫鼠な
かりけり

一此島の廻り十町あまり其外地内とは不見八町斗
乃岩島あり又南は一里ほと離れて或は小さき家
も無き島あり此島を西北の方にみとして乃入江
二三ヶ所ありて八丈船なとも汐かかりまてせん方なき所なり
此入江にて船を繋くなり

神津島乃部

神津島は伊豆国加茂郡下田湊より午未の方にあたり
海上十八里江戸よりは午未の間にあたりて海上五十
余里なる離れ島なり海際峻岨なれとも新島より
ひとつ国地への便りよし順風なれは伊豆の浦々へ一日にて通
船いたしても常に絶えず時候暑寒は伊豆に同しといふ
一此方開けし事いつの比よりか伝ふる事なし其名を古へは
神集島と書今島の名も此名の石出るを續日本紀又
え見れは延暦年中より人住みて国地よりの往来
もありしならむ彼全島奇石といふへき山々の奇き石に

神津島の圖



交り金色をなせり 俗にし桔梗染といへり
て火に入れハ焼て忽ち赤くなり 今絹紬ハ悉く是を用ひて染文
五しきの石といふ白濱明神といふ小社の前にあり清
く澄りし海へ隔て底あり 其例にならひ小石の中に白き石
小青き黒色と成紋あり又黄なる原ハ赤白乃筋あるもあり
てこれを拾ひ取らし 此事を以ひあるにや

一元来小さき島なれ共民家寺宮ともに下り集り西北方
乃海辺に向ひ山を負ひて住居し竈数を百七十軒余人数
ハ九百余人流人一人を人有律義なるを以て新島に寺
しく男女共常にハ安く之衍他を免れ十歳業を
男を漁りをなしと十歳より門乃汐路纜繰にや

糯多き方なれバ鰹を煮るに水より飯の川なかりし実
急出来ず江戸へ出し是を売るに之宅島船急乃
鰹節より甚價高し 且此島ハ寛保乃比より農事
を始めたり 用水川なきが故畑ハ開き麦粟稗并
大根芋さ河芋乃類を作る事少く又も土地狭き
あへ島人一家乃業となす 猶男を魚猟と励て
く海色ハ日を経し浪風乃烈しき折々耕作を
助るに於ても畠の山野乃事ハ女性業とせる
女乃力新島に劣れりとハいへる又山林に入木伐伐採
木を切り薪木を折木の実を取り木を拾ひ木を移
つる枝を取りて伐りなしの猿猴のそしありやまちて木

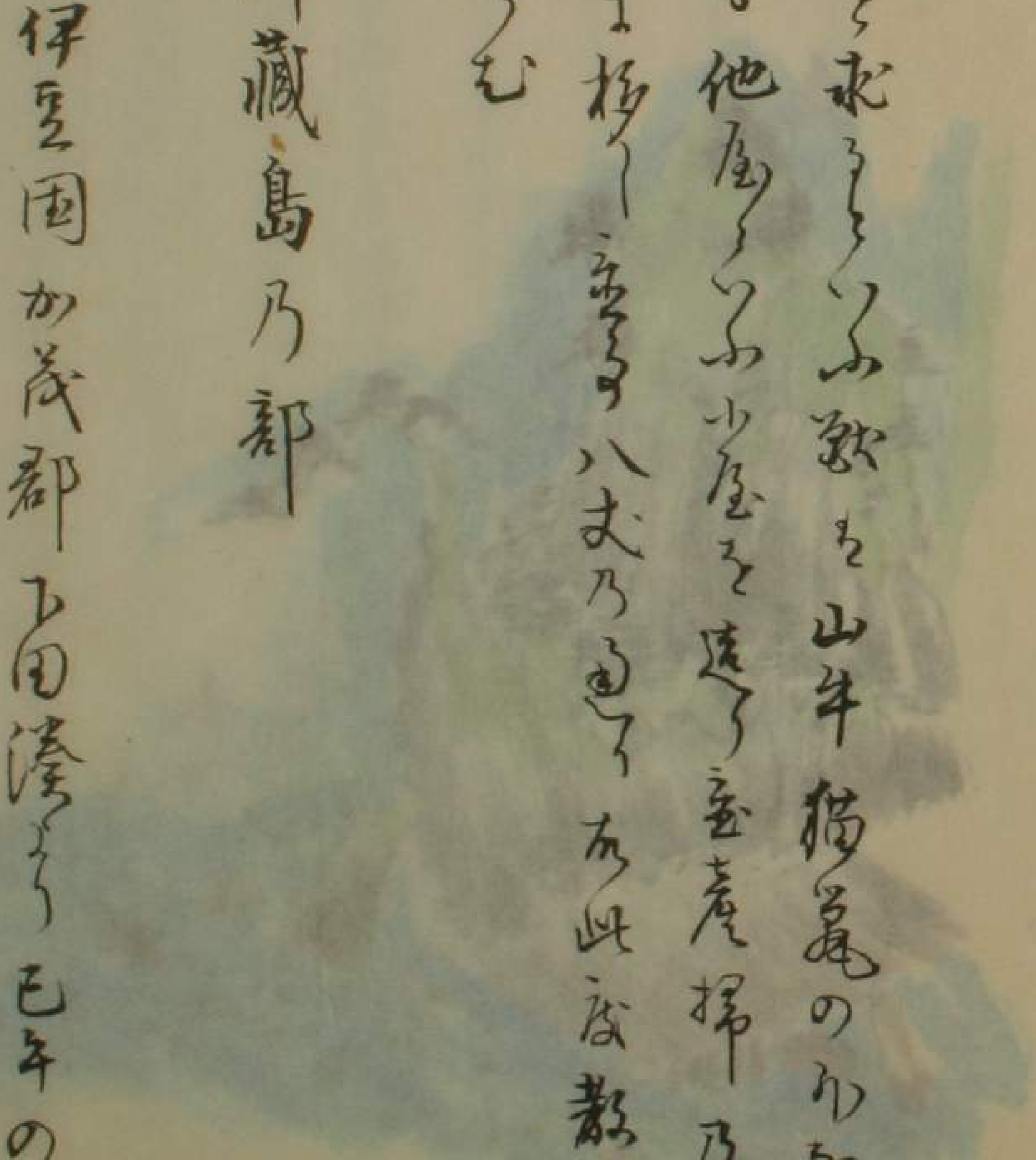
よき蔵疵をうけるあれと気病筋ぼしる所は、く
なやまさ血乃出る所さ牛の葉をもやし粉抹と疵口へ
塗りて血を留るなり

一 當島人神佛を尊ふ先祖よりの崇敬して厚く
是によりて氏神を定め明神といふ所乃神佛を崇むといふ
事は諸寺の年暦よ志るし難し 寺もは伊豆国下田海
善寺乃末寺にて 清風寺といふ浄土宗なり 寛文年
中佛山と名のふ僧開基す由し云へり

一 此島乃草木なら多数もなき国より 実成る物なく山野
ともに海よりは草むし 椎椿乃類多く大木とはなき 椎まるもの
実を採りて 粉乃加へ様草とその実を諸人食ひて

貢代へ穀を求るに此の数を山牛獵飛の乃所かり

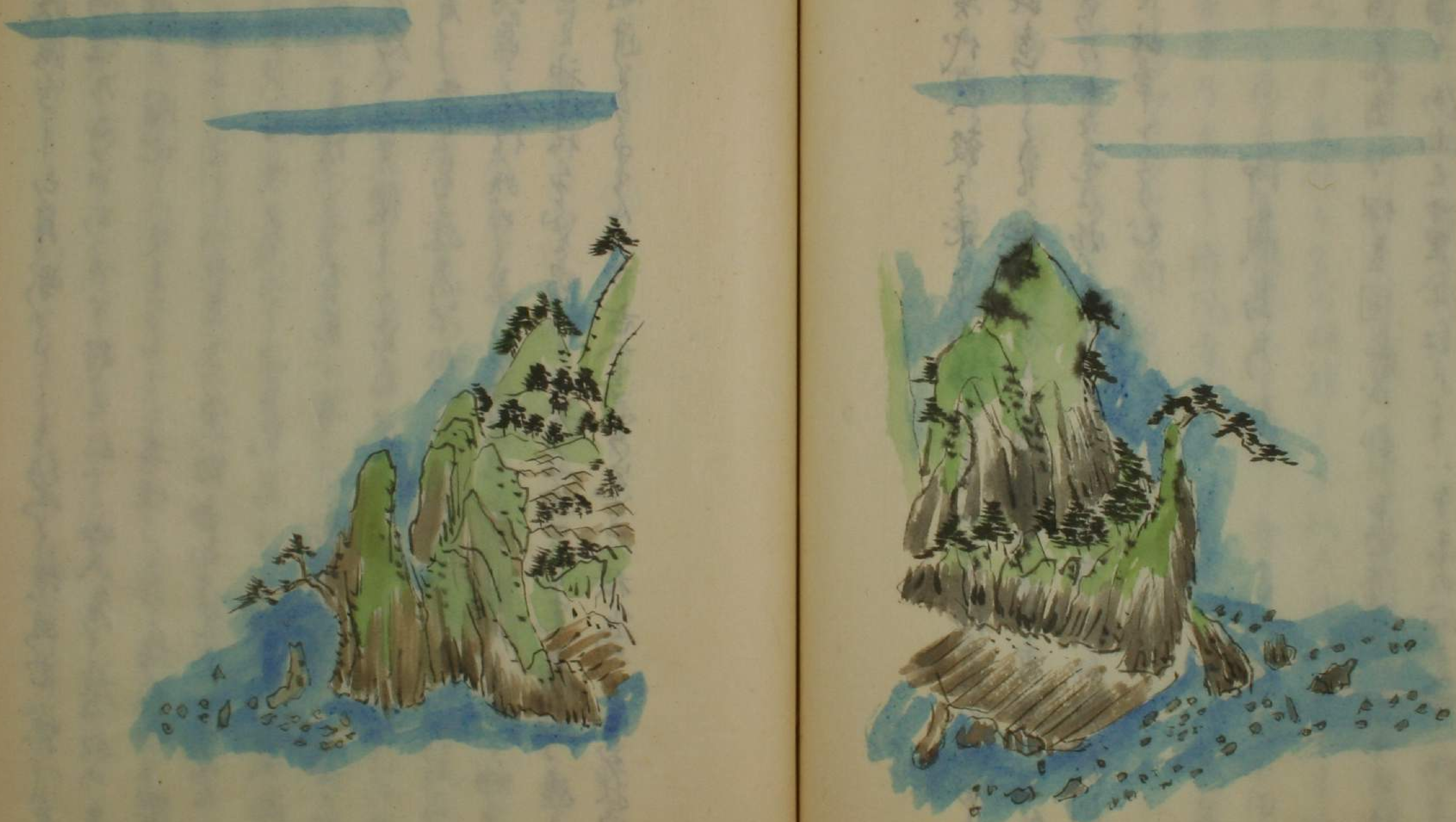
一 此島において他所に小屋を造り蚕産掃及び縫
糸乃女を是に採し其身八丈乃通り 彼此かた數訓し
て此事を志るむ



御藏島乃部

清蔵島は伊豆国加茂郡下田湊より巳午の境み
当り海上三十里余江戸より八午未の間に当り海上七
十里程あり三宅島より八丈里より南へ離れて八丈滋
ゆるし島也へ汐引に寄不し 海邊の巌岩にして 岸ふ

御藏島乃圖



洗浪高く山岸嶮しくして近つきて樵路も嶮しく
海塩乃あつかひあるゆへ程よし船乃出入危く唯一船の島
船にて国地より交易するのみ其便り年に稀に来る其外
へ一里ほと乞ふ船小島より用へ物無事にして之を
四季ともに時候寒暖なし三宅島より来り船する又人物も
形ち言語ともに三宅より華しく法律義あり男女の髪
を編み草縄にて束ね身にあてて膝のあたりまての物
着し帯は葛藤の類の物を打ち和らけ縄にして用ゆ

一此島の人住始めより今に伝へける所は呪や蠱といふ物もな
し神社なとの唱へもなし是は三宅島より持渡きて
開けるよし多し古へは三宅乃枝島にて有けるとそ

三宅よりもうひしに享保乃末 公へ願ひて此島人
悉く江戸へ引出さるる事となりぬ元来小さき島にて寺社
民家とも僅に一所に集り 戌亥乃方は山にて其腹を切開き
其所に住居して竈凡廿六軒 人数百四十人余流人も
今三人あり産業は漁りをなし稼きとするなれはふかく
嶮峻にして海上荒き時は一向に往来もなし海上小舟にて
渡りて海にて稼き専ら島乃内には一向に桑原なともなく
て稲なとも作らす男女ともに農事をなし粟稗麦粟乃
類多く作りて米穀の代りとし是にて凌きて命をつなき
少き地を耕して麦を作り是を主として食とす

一此島山にして自然に生したる黄楊木を伐り 古へ是を

江戸へ伐出し売くこと絶えしめ木性能れなと
く人々望ミ價も下直なれバ多く来る男女とも黄
楊を植育活計を事とし多くハ売物にして
貢一乃経営とす此外売物ハ木乃用ゆる乃みなれ
ハなし

一此島乃氏神ハ藤取明神とて小神社鎮座の
年暦ハ詳ならす寺ハ三宅島大林寺持末寺
にて萬蔵寺といふ浄土宗一寺ありて開基の歴
も未詳不庵室ニ等しき小寺なり

一此島ハ鰹島とて形ハ鶴乃やうなるを見きたる
年宇合ハ海浜にて小魚を網ニ掛て山に住岩

穴ニ巣ハ南はなれて山ニ茂る多く来れ島人此山ニ小屋
をかけ寒ニ移りて夜ハ夜島の岩穴ニ入るを待て是
を捕ふ其数一夜の内ニて千を越るに至る氏多く此
肉を脂にして鰹の塩辛蓄へ菜菜にする
にするも是を煮て喰ふ事ニて其味鰹の肉醤ニ労
らん生なる肉ハ鰹ニ似たり至へ鰹にもまさるや此外の
島国地ニ移りもせる見え哉ハ猫気なきとく

一此島山乃内南の方ニ一丈余の大井あり又大山と云
所にさけく一平ニ清水とて冷水涌出る人跡絶へて
岩石乃際より海へ流れ落る用水とす民家の呑
水ハ其外ニ雨水を溜山より是も皆使して渇意

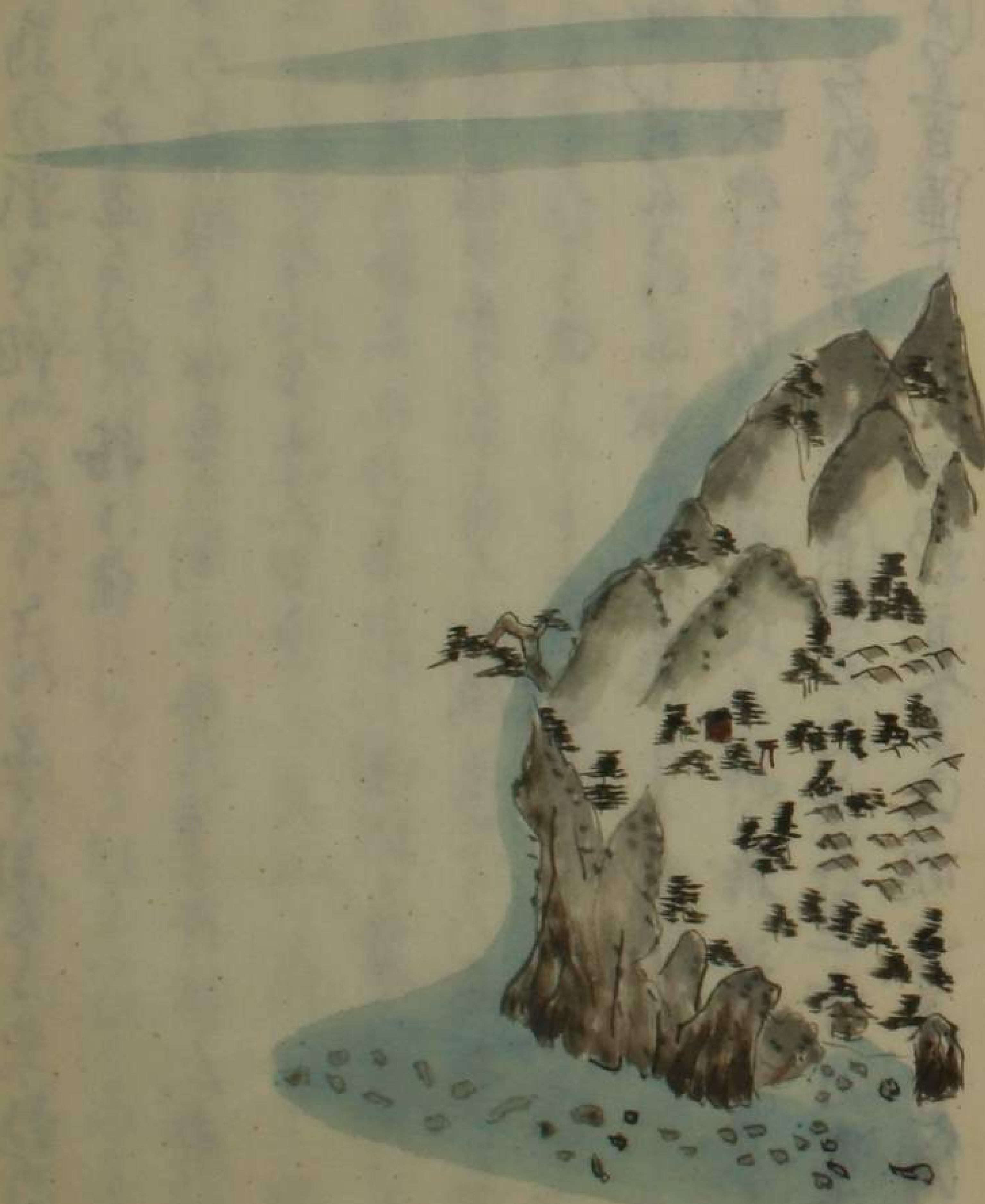
手近くハなき也へ彼大神を箕として遥の所を引ぬ九
子ハ明り此中ヶ彼神を垂箕の用意なるへき也
他も小用ひ寸也を下ぬなり
一此島にも他国を遠り魚血穢れの女を入る事なし八丈
乃ときなるへし今度叙例しく出む

利島乃部

一利島ハ伊豆国加茂郡下田湊より巳午の方に当り
海上十里余江戸よりハ午未乃方に当り海上四十八里
なと伝り伊豆国の方に向ひ荒涼として式風てぶ船を出

国地乃海ハ差ミて低く瀬戸乃汐早く往き来る船にハ海
底より大石を打出して汀に嶋をなし又潮汐の引掛に
多くハ岩窟て渺海なりけるに漁船を浮むる人力を労
する由ハ今日ハ童子の力にも船乃浮ミ寄るなるて船着の
飲苦労て船き島としてハ何れも伊豆相模の浦々にハ
一日乃内に海り江戸へも行き来る事あるまじく絶て一里に
満たる小島にも家数并に新人数之百廿人余流人
ハ三人計らく取り立ての世渡りをなす甚産業にハ男ハ漁て
業をなし重に干魚鰹を取りて国地乃雑穀と交
易し女ハむしろハ織りても織りして今ハ其業絶えて農事
少なきをもして一日毎に畑に出て麦粟乃大根甘藷

利島乃図



菎蒻乃類を作り飛しきは原く用ゆる処へ數の実
乃りし大島なるゝハ勝る處し

一 四季乃気候を伊豆の国に替る事無し人物も律
義にして心厚きに富めるなる

一 此島山野乃中森及び島辺ハ同代に替りて所々る
る山木を椎の木なると多くし様なるハ家毎にも
植て風を防く便とし又その実を取て食代の數
を取ゆる為に獣を猫類ある

一 此島乃氏神ハ八幡別神を以て神社詳座乃年
暦も志れ又寺を甲斐国身延山久遠寺乃末流岸
寺ハ日蓮宗乃一寺なり是を不明年中日浄と云

僧開基称し又一ヶ寺ハ伊豆国下田乃本覚寺末七ヶ
寺にて同寺にて是の開山乃年暦詳ならず

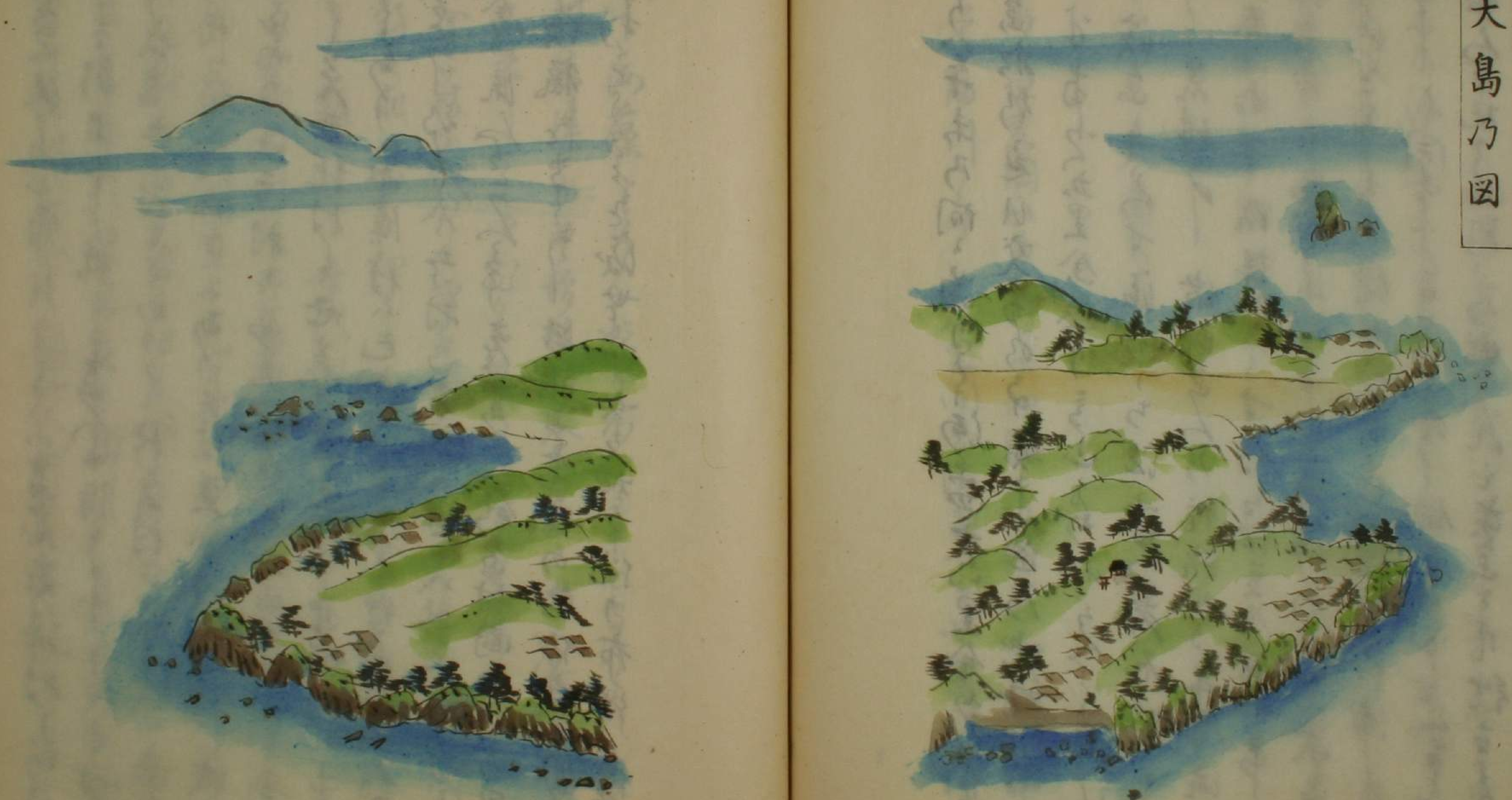
一 此島ゟ清水井水乃類も無く家々の足乃
本毎に縄を結び雨水乃溜をまめ桶に受け是を
溜へ又赤土を竈にのく澄し濾して呑水に用ひ
或は溜に揚置漁船に雨を待受て
す新乃きく常に水乏しき島なる処へ水瓶桶やうの
ものは別に拵て持ちに若きは其器に入て嫁す
村をへく送りをれ乃事として諸の書ハ瓶を織川
持ちに桶を截川持ちなる貯ひなるを
知り又先覚乃語止る所に清き水を呑せんといふハ往き

此よりハ水絶て今度井を掘らんとを初めしよりハ既ひ
掘りかしに地中に盤石有つて掘りて事とけるも人
船来乃便を乏しく所に井あかり侍り落ち谷行ける夜
に堤残築く溜池をかまへ雨を待しけるも島
人力をもつくしつくし年々よりハ必成絶しくて水くを
伊織阪むかしより続けり

大島乃部

大島ハ伊豆国加茂郡下田湊より卯辰乃間にあたり
海上を隔つること十八里同国河津南つゞき七里程江戸
よりハ午未乃間にあたりて海上四十六里余ありて常
に島船行通ひ交易のたよりも安し島乃地理ハ東西三
里半南北五里余蹟りて山なる所々を見て廻り行
す濱島々々すべて所乃うち沈に此處岩石なり多れ
出て荒磯なりし備此島人乃信頼ける年暦流人
配所とかつし始め拝みて寸嶋を伊豆乃海の島とて
孝安帝乃御宇に完帝と云ひ伝ひつきとも大島ハ
国地をさる事僅七八里なれて伊豆乃浦しと
等しく開けり才の伊豆の国とい云古よりも
罪人を配する所ハ乃地なれども大島ハ往古より
配流乃人なかりし成るべし　文武天皇元年に役小角

大島乃図



此島へ流されし小角の住たりしは岩窟泉津村なり
今も行者堂と称し島人参詣する所となりて此外
今此島五ヶ村にわかつ新島村と云ふ村は島の
中央の方にて海邊にあり是に並びし岡田村は戌の
方にあり此二ヶ村を本島とて人物も言葉も別なる
方にて差木地村を西南の方にして野増村は未の
方にあり泉津村は巳午のあたりて卯辰の間に家
間遠にして都て今五ヶ村の家数凡百十八軒人数二千三百
人余り流人もあり産業は新島村岡田村の男
は漁猟をもなし其外に薪炭の家業を勤めて
専ら商売をも渡世とし女は畑を作り布織の業にて

織りて海藻をとりて粗かふる事をなしけれは差木
地村泉津村は野増村を釜百姓と唱へ若き娘等
も家業としては中船に乗り享保の頃より今を
男女も薪を伐出し或は茅伐刈く若布に編みて売代へ
て穀を求め或は畑を作りて作物実菜をもて乃ち穀を
なせり 粗として世渡るもの少なからす

一 此島四季の時候至て暑寒もなく伊豆に替ることなし風
人物も新島岡田も凡常に船家に至地へ行通ふ
在風俗衣食言語も伊豆国と替ることを聞し此島高ひ
と家業とする也気質は御し方なり差木地泉
津野増村は左へより岡地へ渡るる者も無し男は

惣髪なし元結ひ冲を用ひす度もなしや作物に
いろ／＼髪をむすひ多くは礼髪なり女も是に准し紅白粉
なと作物を世にある事は知らす年長しは眉をそります
歯を染る事はなし好みて姿を作りやしき振子の衣服は男
女ともに藍染まては浅染ふ縞を多くは袷とし冬は一重
にして帯を丸縄ならす能くを要するもの正路
なるなれは男女とも名をは改めるの妨るはさみや東四郎
三郎の式を百太郎次郎なとをいふ是ハ一男を太郎
二男を二郎と以下けるへくまさる也住居の地名物を
父祖父乃名をかふりて東乃四郎なと一男なられハ東四郎
三郎又八子かに男をは東四郎太郎三郎と呼なと呼之

なり言語もわかりかたく父をアヤ乃男子を二ウと云女
子をアマアやといひ父をテツコ母をアツコ夫なる妻を呼には
アツコといひ書なり夫をテツコとも呼ふなり又好男なとの人
乃方へ音信に行又は餘の処りに嫁みなと那ら／＼アサ
アケイタハハアタカとかふ是を軽食嗜ひしやなを以ゑるを
みろ／＼先来し会を事とまより出しに物請ふ那ふ
是つとい穀乏しき色へ去りつかり会を尊みなるへくてとなる
那り慮し

一 作物ハ麦粟稗大豆大根芋乃類を作ふに性を
錆れる方なれは耕作等閑なりゆへ実のり薄し
能きより時を量く宜し云ぬ

一 享保乃比内桂乃蘇鉄渡させられしを植育せしに
二本八拾ばかり一本ちぢれ今に尋ぬれば二三本も
かく枝葉もよく繁茂してまた文宝暦乃比朝鮮の黄楊子
を渡させられしは八府しやうがく長二間斗り於黄楊四百
本余あり 此外山桃乃三本草乃ひとつ毛も皆此地
にありふるのを獣を野にはなち馬多く民家に高く牛馬に
是非関は是非鵜捕網に野埋ありて木地家津乃男を
乃これを打捕う浅見ふに禄番馬に打込 萱原山谷
岩坂にひきて蝙を集しとく追飛し野牛野馬を
追詰馬上より尾筒をもって引留め或はなわ掛みては
とげき牛を取って角実に伝はりたるとも綱をもせちぎれ

これく組伏つかまつるくるめけるや又牛の多きその其数
またありし五尺七尺なれば八二三尺にて打群て人家
をくもり出化物を盗み喰ひ山裏手八一群ト有る二百九
打集りて直ふ飛ひ此牛乃むれしらず三尺とも
渡させられし子を生し年段追て数殖増す享保
乃比御用乃為に行かれて二三足生捕りて来りを
ける事まをかめ牛数しらず其の八度に罷を世話る
ることいとひなかれはして追放たるのはせらるる人れ植増し
て縦細なる事に此外の獣八猫を兎もありありし
一 此島府し 山乃焼るの頃乃路をして煙る
回庭ありて烟出るらへ尋行くところに三原を以て山の

頂に一所あり深さ七八丈斗の洞となり其内筋ち
かく焼割て夫より煙吹立折々焼出るに此ふもと
に沢中沢赤沢とて深き谷あり是に谷の焼埋
にて海へ焼出昔乃焼所を第と理まりし處
餘多ありし焼さりに此乃やうに年暦も弁し
詳なる書物にも見えされと貞享元年に焼出し又天和
四年より元禄元年迄焼つゝきより此を行しと云ふ
六年焼起り至七日まて出火強く晝夜震動し
て那山乃業を怠り又海魚得るにも漁父乃営に絶
難儀せしよし志ハあれと島にも是故ツ神火と称へ
火をみなゝハ清め崇むるよしいふ自ら其比ハ之を

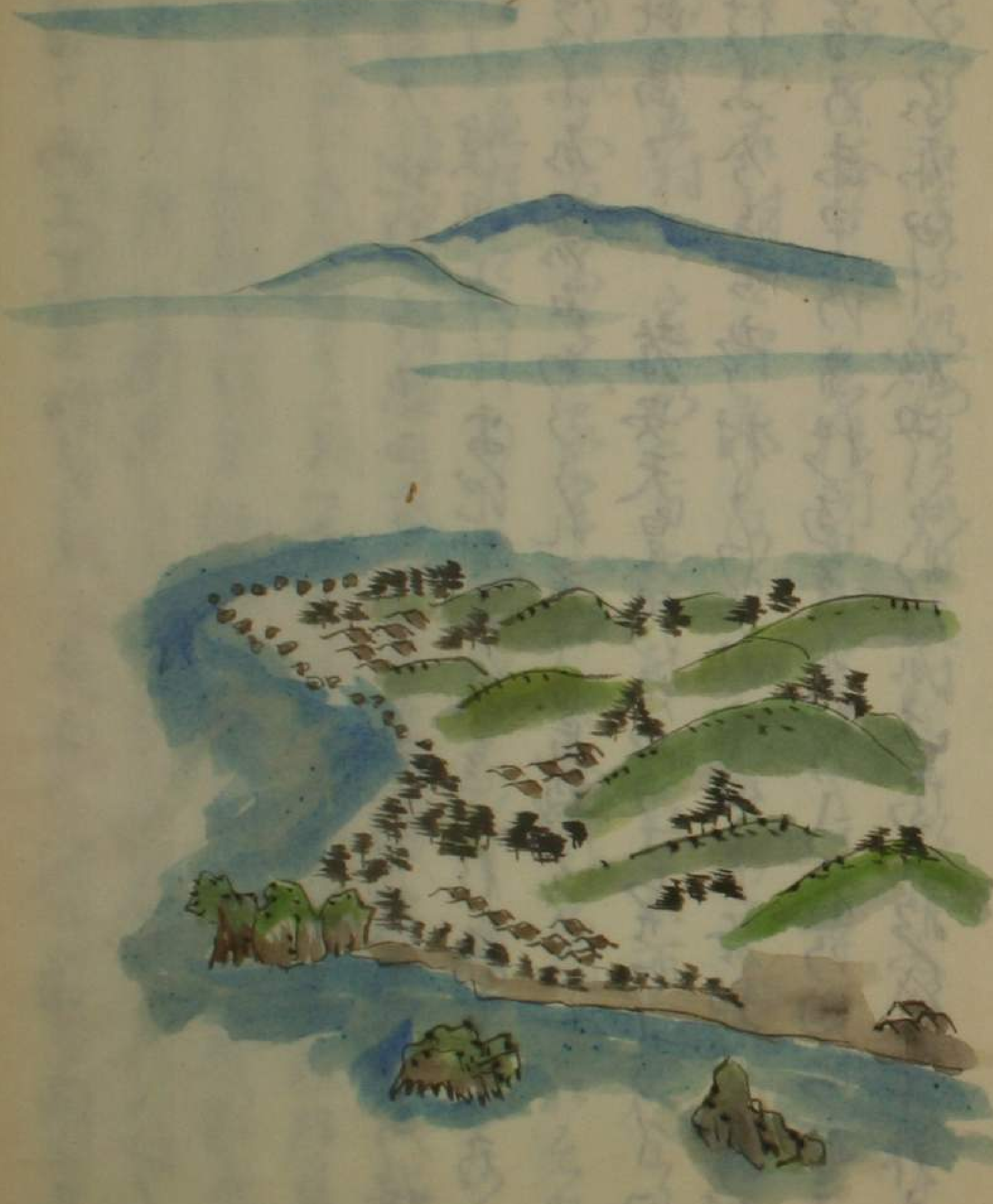
ありつゝんハ今に行の傳ふれとも寸嶮岨なる巖を焼
巖貫き谷を埋海へ焼出しハ其前にて焼乃あり
都て島乃地底まりしに出る其年暦ハ皆
四神の爲成る民ハ恐れハツ神火と称し佛の理
見ゆる云し

一此島にも他國を造り産婦乃忌に経る女は穢
して柳し島中八丈乃ことくかゆる成し
是故なる也

三宅島乃部

三宅島ハ伊豆国加茂郡下田乃湊より巳午に当り

三宅島乃図



嶋ハ海上廿二里江戸より八丈島乃間ハ嶋ハ海上六十
里あり 此間ニ潮急にして汐早く渡海やすからすと
いふ 順風ニ伊豆相模乃浦より一日にて渡
嶋なり 江戸より舟ニハ四五十日かゝり島船行通ふ
島乃地形ハ東西平均二里余南北ハ四里余と聞ゆ
山々嶮岨にして平地なし 濱辺ハ磯皆波乃打
洗ふ所岩石あらはれ寄て荒磯なり
一 此島ハ 孝安天皇乃御宇ニ開けしよしいひ
傳ふ 今民戸五ヶ村ありて伊豆谷村と云ふ村ハ
嶋乃東南乃方にて西嶋ニ有り 此村乃内ニ船つく所
之人家所也 役所あり船ハ此處ニ船付と云村
なりの事にて御役所有り 此村より船乃出所なり 保家村
ハ伊賀谷と神なる村の間の山ニあり 在坪内村ハ南ニ当るの
方にて古村ニ卯辰乃方ニ当り 丑寅乃方人家間近く
離れて五村乃家数二百七十軒人数千六百七十人余り色
乃流人百四十人家業ニハ伊賀谷神奈村ニ船着ある所也
男ハ魚猟をしてくらし又日船を離れて島中にて荷物を
江戸ニ積出し諸事交易乃用達ハ代銭ニ女ハ畑作
海藻乃類をとりて粮にあてるをもて又紬織乃柳
荷物と揚猟船帰りも之ハ魚物代物隠し絹宜ふ八
ぶりを女乃業なり 是ハ代わり其力ハ男より一倍ふ
なり 寛売乃女ハ其銀代大桶ニ入て数年ふ五十

もと浅所なりけり又十斗を取て提灯し鰥六十短
弐貫と廿四五匁目より二十匁目斗りを賃売夜浅傳
ひ雑阿乃坂浅なり家々なり近きハ五所七所遠きハ
十五所廿所余ハ阿原阿浅家々殊に稀なり是ハ米一俵
なりハ十四五歳乃童女ハなりけり田舎ニ伊豆坪田阿古
三村も男女ハ畑浅作り山稼浅なりの業として木
乃実草乃葛蕨鮑隠岐乃類を採して元の糧とす

一 此島乃時候ハ寒暑ハやはらかなる事にて伊豆殊に亜弥
をのこ静なる事なし人物ハ一拵悪なる方なり
末なれとも伊賀谷神着の二村ハ多く和らかにて
常に江戸とのかよひ湊して行通ふ故風俗言語衣食

それ伊豆国よりかよふ事阿古坪田伊豆の三村ハ山稼
なき事にて平地へ通ふ事なれハ言語ハ
わかりよく男女とも髪を元結にて用ひず衣食共
奢なり

一 此島ニハ用水乃手当なき故古来より畑斗りに作物
する園種類ハ少しにて麦粟黍大根芋薩摩芋之
類作ふりし土性瘠れたる方なれと坪田阿古村ハ砂
地にて所々磯浜故旱損乃ひ易く風雨強く作実の
みのり熟せず依て是を患ひ其外土地相応の耕
作業未だ行へられハ今に及ぶ甚だ試みし
一 宗毎ニ牛馬を飼ひ鳥獣村木の類を附き運ひ人力の助

とし又野山に鳥川坐馬牛多し此外獣は猫鼠
斗りなり此嶋ハ蛇山虫百足乃類多くて毒虫一
切なし蝿ハ人家に蛇ハ山野に在るに四季共に多く
出たし行人乃袖に入り面をさし刺すこと多くのを
嫌ふ附たる方のみ多く候

一 嶋も山焼あり山焼乃儀ハ之を以正徳元年焼始
め同五年まて焼又宝暦十三年て焼起り明和元年
よく火勢強く焼きたるよし正徳乃焼跡ハ今や
草木しほえなりしは今宝暦より只今焼山となり
影しきことなくて焼砂原となりたる場所ハ何町歩ともなく斗
乃新し又新しく焼候て洞穴去年中まて正徳乃ニ所

并に宝暦十三年て焼抜たりしかて堺同村ハ古
村乃内より洞となり縦八九十間水上深さ二十丈
余水下ハ幾千尋なるを知れ不海へ焼抜けたりとか
今や表海と等しく汐乃さしひきあり今焼抜たる処を
海岸より二里ほとある地ハ八丁余り之内岩壁高く五十
間ばかり深さ三十丈斗り外洞となりて内よりも海に
火二三丈あかりしも元のかけたる洞深き内へ下りてみる
煙りともならず正徳及び宝暦以来乃焼たる海
へ押出し今は古懐凝りて居り傍らに寄りしもあらず

一 山野乃樹木ハ大して同地に植物ありて異形ふ
この木え千椎さくみ樹乃数多し島も同地乃山

島に多き数のみなり

海島風土記巻之上終